

御宿との不思議な縁

東京から外房線特急に乗っておよそ1時間20分。太平洋岸に面した御宿おんじゆくという町がある。「いい波が来る」とサーフィン族はよく知っている。

昔は漁村だったその町との“奇縁”がなぜか広がっている。神奈川県神奈川県の海岸沿いに生まれた筆者との接点は「海」くらいだったが、この10年ほどで突如「気になる町」になった。

日本とメキシコの「交流400周年行事」でその場所の歴史の意味合いを知った。400年余り前の1609年（徳川2代将軍秀忠の時代）、メキシコのフィリピン総督ドン・ロドリゴの乗ったメキシコ船が御宿沖で座礁した。

なぜメキシコ船が日本沿岸に近づいたのか。それには理由がある。コロンブスがアメリカ大陸に到達してから70年余り。1564年にスペインの副王領となったメキシコは太平洋の横断を計画し、同じスペイン領だったフィリピンとの間に定期航路を開いた。年1回使節団を送り込んでいたが、フィリピン総督が任務を終え、メキシコに帰る途中に事故が起きた。

記録によると、御宿の海女さんたちがロドリゴら317人を助けた（56人死亡）ことになっている。地元・大多喜城の城主はこれを美談として幕府に報告、メキシコ人たちを伊豆で隠遁いんとんしていた徳川家康に接見させたという。

家康は初めて見るメキシコ人にびっくりしたのだろう。「帰るための船を建造せよ」と命じ、翌年幕府建造の新船でメキシコ・アカプルコまで渡航させたという。その中には22人の日本人が「護衛」と

して含まれていた。

驚嘆すべきことである。太平洋横断の遠洋航海に耐えうる船の建造技術を江戸時代初期にモノにしていたことになる。その後しばらくしてキリシタン禁止令が強まったこともあり、ぎりぎりの救出劇といえる。

そこまでは知る人ぞ知る過去の話。でも、まさか会社の元部下が御宿のお寺の住職になろうとはついぞ考えもしなかった。

長慶寺という曹洞宗の住職がその人である。曹洞宗といっても檀家の宗派・宗旨はいっさい問わず、樹木葬や海洋葬を発案、インターネット時代のお墓づくりを提案している。「寺コン」を始めたのも彼だ。お寺でクラシック・コンサートを何度も開催し、評判になった。

この男、東大卒、元新聞記者、元テレビ・プロデューサーという変わり種。反骨精神旺盛で正義感が強すぎたきらいがあり、どうやらテレビ会社で人間関係がうまくいかなかったらしい。仏教を学び直し、愛媛県のお寺で自分の息子と同年代の雲水うんすいとともに修行し、僧侶になった。

「お経をよく覚えられたね」と聞くと、悪戦苦闘だったらしい。「でもあれは読んでもいいんですよ」と笑う。ただ、仏門では彼の考え方が飛び過ぎていたのか、町議会選挙に立候補したがあえなく落選した。

御宿の小高い丘の上に、「メキシコ記念塔」がある。メキシコ人救助の証しだ。1973年には、御宿とアカプルコは姉妹都市協定を結ぶ。78年に来日したロペス・ポール

ティーリョ大統領がヘリで訪問したこともあった。「オンジユク」はメキシコ人によく知られる町となった。

そこへやってきたのが著名バイオリニストの黒沼ユリ子さん。20年ほど前になるが、メキシコ市郊外の音楽学校「アカデミア・ユリコ・クロヌマ」でお会いした。子どもたちを相手に、熱心にバイオリンを教える姿が印象的だった。その甲斐あって、プロのソリストを含め、多くのバイオリン弾きがここから巣立っていった。

その彼女が長年住んだメキシコから帰国し、御宿の海沿いに住居を構えた。お坊さんとバイオリニスト——奇妙な取り合わせの2人の知人が相次いで御宿に住み、筆者にとってこの海岸が大きな存在になり始めたのである。

黒沼さんはもともとチェコのプラハに留学中メキシコ人と知り合い、結婚後はメキシコに移住した。物書きの才もあり、『メキシコからの手紙』（岩波新書）など多数の著書を出している。「アカデミア」を休止し、日本に戻る決断をしたのは御宿という海を隔てた地縁があったからだろう。

実はメキシコは、御宿以外にも日本と深い関係がある。1888年に日墨修好条約を締結したのも、1897年に日本人が集団移民したのも中南米では最も早い。

有名な交換留学制度もある。1971年からスタートした「日墨交流計画」は、毎年50人ずつお互いに留学生を受け入れている。日本政府は今「地方創生」などと叫んでいるが、御宿のように外国と結び付き生き方もある。 ●

ブラジルサッカーの生きる道

ブラジルサッカーは今どうなっているのか、気になって仕方がない。1950年に始まったサッカー・ワールドカップ（W杯）。さまざまな記録や話題が語り継がれているが、2014年W杯の“ブラジル崩壊”ほどショッキングな出来事はなかった。

ブラジルは、難敵ドイツと準決勝で対戦するが1対7の敗戦。サッカーの世界では大人と子どものスコアだ。思い出すのもいやだが、サッカー王国の伝統もプライドも地に墜ちた。

「その後は何事もなかったようにブラジル人は暮らしているよ」とサンパウロ在住の知人は言うが、そう簡単に忘れられるものでもない。何かのきっかけであの惨劇がよみがえり、気持ちが暗くなってもおかしくない。

点取り屋のネイマールが故障せずにあの場にいれば、いい勝負をしたとの見方は確かにある。でも接戦であっても結果は負けていただろう。信頼しているサッカー記者に「ブラジルサッカーの再建策」を聞くと、「センターフォワードがないのが弱点」だという。

「でも欧州の選手育成システムをまねる必要はなく、ブラジルらしい天才を探し続けることだ」となぐさめにも似た、もっともらしいことも言う。ということは気長に待つしかないのか。確かに世界最高のエースはポルトガルのクリスチアーノ・ロナウドであり、アルゼンチンのメッシだ。ネイマールの名前はまだ出てこない。

これではブラジルサッカーの将来は暗い、と一瞬絶望的になったが、実はそうでもない。一筋の光

明がうかがえるニュースがあった。視覚障害者たちの5人制の「ブラインドサッカー」である。2014年11月、場所は東京のど真ん中。ブラインドサッカーの世界選手権が行われ、ブラジルが優勝したのだ。

不勉強ながら、初めてテレビでプレーを観て驚いた。5人のうちゴールキーパー以外は目隠し（ブラインド）をし、鈴の付いたボールを蹴り、ゴールを奪う。フットサルコートを使う点で、ルールはフットサルにおおむね準拠している。

これがすごいのだ。目が見えないから、パスも攻守の切り替えもシュートもゆったりしているのかと思いきや、そんなことはない。鈴の音を頼りに、選手は目まぐるしく動く。

ブラインドサッカーは1998年に第1回の世界選手権が開かれ、東京大会は6回目だ。大会の開催間隔は変化してきたが、圧倒的に強いのがブラジルだ。しかもブラインドサッカーの日本語の略称は「ブラサカ」だという。ダジャレのようだが、ブラジル人にとっては応援のエールに感じられ、ありがたい話だ。

第1回大会からのブラジルの順位は1位、1位、3位、2位、1位。東京大会は2大会連続優勝だ。W杯でブラジルを粉砕したドイツは8位と精彩を欠いた。この大会では日本代表も健闘、過去最高の6位に入った。

2016年はリオ・オリンピック、パラリンピックが控えている。ブラサカはそのパラリンピックの正式種目に登録されており、ブラジルチームの勢いは増しそうだ。

ブラジルの子どもたちはデコボコ道のストリートサッカーで技を磨き、サンバ踊りに合わせてフェイントをし、砂浜のビーチサッカーで体力をつける。サッカーは生活の一部、といわれる伝統が目隠ししても生きてくるのだろうか。

そういえばフットサルの戦績が後回しになったが、これがブラサカよりすごいのだ。2012年のフットサルのW杯に、キングカズ（三浦知良）が日本代表の一員として参加、代表選手たちを鼓舞したことは記憶に新しい。

フットサルのW杯は、ブラサカの10年前の1989年にFIFA（国際サッカー連盟）公認の第1回大会が行われた。2012年の第7回大会の優勝国はブラジル、2位はスペイン、3位はイタリアだった。日本は三浦カズのリーダーシップもあって4度目の出場でベスト16に進出した。

これまでの優勝国はブラジルがなんと5回、スペインが2回で、それ以外の優勝国は出ていない。

ブラジル経済は停滞したままだ。2014年は0.3%前後の低成長率が見込まれている。しかし、彼らは貧しくても楽しげに過ごしている。私たち外国人が見た風景と現地の人々の意識は全く違う。

ブラサカとフットサル。2014年の“正規軍”のサッカーW杯は悲劇で終わったが、ブラジルにはまだ多くの引き出しがある。ブラジルサッカーに思い入れが強すぎるのはわかっている。ドイツが強いのもわかっている。でもブラジルはまだ捨てたもんじゃない。

（日本ブラジル中央協会
常務理事 和田 昌親）

